

野の仏ギャラリー ⑮

観世音菩薩立像

南多久町妙覚寺

丸彫りの坐像で、足元には別造りの蓮華台があります。頭部に円文のある宝冠を載せ、眉間に白毫があります。ふくよかな顔立ちで、両手に蓮華を持っています。袈裟には三重になつた縦長の衣文が見られます。観世音菩薩は広く民衆を救済するため、相手に応じて変化し、六観音や三十三観音などの分身を生み出しました。

銘「講衆」三元禄九丙子天十一月吉日 人名五名」



○菩薩は本来悟りを開く前の修行中の者を称します。

○白毫は仏の眉間に生える白い毛で光明を放ちます。

○講衆は講に参加する人で、今回の例では観世音菩薩を信仰する人たちです。

○銘の元禄九丙子天は西暦一六九六年です。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

今月の論語

忤せずんば発せず

苦しんだあとでなければ
上達しない。

今月の帰宅放送は、東原摩舎中央校9年の石丸瀬里奈さんです

教育長コラム

ちよっとい話



「先生」

日本の文化を伝えたくて、地域の方に俳句の手ほどきをしていた。その方の名は茂吉さん、ふさわしい御名前だった。独学で句を書き溜めて新聞に投稿されていた。子どもたちは、褒めているうちに時々素晴らしい句も作つた。茂吉先生は、子どもたちの分まで、裏が白の新聞広告用紙を溜めて持参してくださり、広告用紙は立派な学習用具となった。
勉強をしたくてもできなかった若い頃の仕事の合間にも、退職後の野良仕事の合間にも、常に裏紙と鉛筆は傍にあった。茂吉先生の人生を支えた句づくり。辛い時、悲しい時も、句に励まされたのかも察すると、胸も熱くなる。
茂吉先生は外部講師だが、子を取り巻く大人は何らかの先生だろうと思う。子は見て育つから、範を示す大人であるだろうか、と時々自分に問いかけては反省する。

教育長 田原優子

市民文芸

◆ ふり向けば 幾星霜の道程に
夢と希望が 風に吹かるる

◆ 庭仕事吾に委ねてあれが咲き
これも開くと 夫の喜ぶ

◆ 夢という 地図は破られ進むべき
道を心に 問いかけてみる

◆ 人間が地球をこわす愚かさよ
コロナ禍豪雨に 知らされる今

◆ わが歌に 合わせ間を置き 鳴く小鳥
ひと声ふた声 風呂の窓越し

◆ 時鳥姿見えねど 懐かしく
夕管や 髪湿りを 束ねたる

◆ ご浄土は 有ると思ひし蓮の花
新品の 三輪車の子 風光る

◆ 灯台へ 続く細道 青岬

◆ 忘れぬ 昭和の 歌詞がある 演歌

◆ 微熱では 済まぬ 予感の 恋心

◆ 他人だと思ふ 涙が すぐ乾く

◆ 友と会う 昔の話と ぎれがち

◆ 昨夜見た 夢の続きと 目を閉じる

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

◆ 人間が地球をこわす愚かさよ
コロナ禍豪雨に 知らされる今
梶原恵美子

◆ わが歌に 合わせ間を置き 鳴く小鳥
ひと声ふた声 風呂の窓越し
尾形 節子

◆ 時鳥姿見えねど 懐かしく
夕管や 髪湿りを 束ねたる
本村 則子

◆ ご浄土は 有ると思ひし蓮の花
新品の 三輪車の子 風光る
武富 律子

◆ 灯台へ 続く細道 青岬
富樫 明美

◆ 忘れぬ 昭和の 歌詞がある 演歌
大谷 和

◆ 微熱では 済まぬ 予感の 恋心
三塩 不二子

◆ 他人だと思ふ 涙が すぐ乾く
田代まつこ

◆ 友と会う 昔の話と ぎれがち
古賀 弘子

◆ 昨夜見た 夢の続きと 目を閉じる
松下 修

川柳 《多久川柳会互選》